よしわら

第99号
昭和41年9月5日

発行　吉原市役所
吉原市今泉43の1
電話(代表)②3111番
編集　市長公室

……市民の動き……
(8月1日現在)
男 … 46,444
女 … 45,811
計 … 92,255
世帯数21,346

交通標識
やめてほしい酔ぱらい運転

稲垣　隆嗣

テレビが毎日事故のことをしらせる。ぼくは、いつもそれをみてかわいそうだと思います。

ぼくはバス旅行にいったとき事故を見ました。自転車とタクシーが横だおしになっていました。自転車は田んぼに落ちてメチャメチャにこわれていました。タクシーも、前のガラスとバックミラーとライトがこわれて田んぼに落ちていました。

おとなのひとが事故をおこすのは、酒をのんだり、夜おそくかえってくるからだと思います。

ぼくたちも交通のきまりをしっかり守りますから、おとなのひともいつも左右をよく見て事故をおこさないようにしてほしいと思います。

（原田小）

……敬老の日……

国旗を掲げて
祝いましょう

敬老の日（国民の祝日）9月15日

おとしよりを大切に
70才以上2909人

九月十五日の「老人の日」が国民の祝日「敬老の日」になりました。この日は各地区毎におとしよりを敬愛し、長寿を祝う各種の催しが行なわれます。しかし、ここで考えなければならないことは、おとしより自身も若い世代に仲間入りしていくということではないのでしょうか。ともあれ九月十九日を家庭ぐるみ、地域ぐるみで有意義にすごしたいものです。

九月十五日は国民の祝日「敬老の日」。この日から全国がいっせいに老人福祉週間がはじまります。この週間は、国民がこぞって老人のしあわせについての関心と理解を高め、長年社会につくしてきた老人を敬愛し、その長寿を祝うとともに、老人自身も自分たちの生活を高めていくために行なわれるものです。

吉原市では市、社会福祉協議会、婦人会などが中心となって〝みんなでつくろうたのしい老後〟をモットーに①老人と若い人が家庭、職場、地域社会で話し合いお互いの立場を理解しあう②家庭の中で老人にふさわしい役割を与えるようにする③老人に慰問と激励のたよりをおくる④健康にきをつけ、時代感覚を身につけた話せる老人になる運動を行ないます。またこの週間中に各地区毎に映画会や原田婦人会による老人ホーム慰問などが行うことになっています。

市内の満七〇才以上のおとしよりは、大石ふみさん（鈴川町二丁目）の九九才を最年長に二九〇九人（男一一四八人、女一七六一人）で、このうち九〇才以上のおとしよりは二三人います。老人人口は年々増加しています。これは医学の発達と社会生活の向上によるものと考えられ、こんごますます増えると思われます。

市では、七〇才以上のおとしより全員に敬老と朱染したタオルを贈るとともに、満八八才の米寿をむかえられる矢部しげさん（本町一）ほか一六人の方には全日本肖像美術協会・馬堀喜孝画伯の描いた家紋入りの油絵の肖像画が贈られることになっています。

県社会福祉協議会、県老人クラブ連合会は七〇才以上の、地域文化の向上、地域産業の発展につくしてきた模範老人に感謝状を贈ることになっています。吉原市からは次の一〇名が模範老人として表彰されます。

大竹栄太郎さん（鈴川町二・七九才）渡辺峯松さん（桧町・七九才）田中政一さん（田中町・八一才）石井善蔵さん（西比奈町一・七四才）平松平次郎さん（原田町三・七二才）小沢清さん（栄町八一才）中島勝太郎さん（伝馬町・七二才）村井精作さん（新追町・七二才）望月まつさん（八王子町一・七三才）高井哲三さん（本町二・七四才）

いいこと、今日一日のチャンネル権はオジイチャンオバアチャンにまかすんですよ

一世紀生きぬく
最年長の大石ふみさん

吉原市内の最年長は鈴川町一丁目の大石ふみさんで満九十九才。

ふみさんは大石政雄市議の母堂。「女の子ということで入籍が一年位い遅れたらしい、ほんとうは百歳を越えているかもしれない」政雄さん開口一番こういいます。

明治、大正、昭和の三代を生きぬいてきた大石ふみさんは、吉原市の生辞引き。想い出は吉原宿にはじまり、明治のはじめ吉原宿を襲った大津波鉄道馬車、東海道線の開通等々数えあげればきりがない。政雄さんは「母が一番喜んだのは、六〇年前家に電気がついたときだね」

あんどん、ランプ生活をしてきたふみさんには、電気は東京、大阪を四時間足らずで走る新幹線よりずっと「重宝」なものだったにちがいない。

親ガメの背中に子ガメをのせて、子ガメの背中に孫ガメをのせて――曽孫（ひまご）の早登美ちゃんがCMリンゲを口ずさんでくる。「おばあちゃんは耳が遠くなったので、テレビはあまり見ないの」という。

自分でつくった着物をきるときが一番楽しい。ふみさんは昨年あたりまで、夏には冬もの、冬には夏ものといった具合で何十枚、何百枚もの着物をつくってきた「だんだん眼が見えなくなってなあ」ふみさんは好きな針仕事ができないのがとてもさびしいといいます。

おばあちゃん〝チャーハン〟ができたよ、台所から声がかかる。ふみさんの大好物だ――政雄さんは「ハイカラなんですよ、うちのおばあちゃんはね――」

来年は明治百年にあたる。吉原のスパーウーマン大石ふみさんが歩み続ける一世紀の記録は一口にはいいつくせないようです。

腹八分が健康のヒケツ
模範老人の石井善蔵さん

模範老人で表彰される西比奈町一丁目の石井善蔵さん。

石井さんは明治二十五年二月十五日生れ。満七十四才。「大食いは寿命を縮める。腹八分目が健康に一番よい。それに少量の晩酌だ、酒は百薬の長というからね」これが石井さんの長生きのヒケツ

七十四年間には苦しいこと、つらいこと、楽しいこと―数えきれないほどの思い出があるという

その中でも石井さんにとって忘れることのできない一つに北伊豆の震災があります。「あれは昭和五年だったと思う。伊豆に大きな震災があってなあ、わしも消防団員として救援にいったよ。家はあちこちにでき、それはひどいものだった」

こんないやな思い出ばかりではない。「わしにはね、二十人の可愛いい孫がある。〝おじいちゃん〟といわれると、ほんとうに長生きをしてよかったと思うね」気丈なおじいさんも孫の話しになると目を細めます。しかし、石井さんは世相をチツピリ批判する。

とかく若いひとは、としよりは頑固だ、わがままだというが、わしらも話せるじいさま、ばあさまになるよう努力している、若い者にもわかってもらいたい

模範老人として表彰される西比奈「寿クラブ」の副会長石井善蔵さんはこう語ってくれました。

私は老人の話し相手
家庭奉仕員　山本ゆきさん

家庭奉仕員といつても仕事の内容をよく知らない方が多いと思います。家庭奉仕員は、めぐまれない老人家庭を巡回し、おとしよりの身の回りの世話やおとしよりの相談相手になるのがその仕事です

現在県下に一九人の方がこの仕事に従事しています。吉原市では鈴川町二の山本ゆきさん（五七才）が三十九年からめぐまれない老人家庭に奉仕を続けています。

山本さんは、市内の老人家庭一〇世帯を一日に二世帯づつ巡回するのが日課で、食事や洗たくなどの家事を助け、おとしよりのなやみごとのカウンセラーとして活躍しています

山本さんは「家庭奉仕員になつたらと相談を受けたとき、わたしにできるかしらとしりごみをしました。最初はこの仕事を正しく理解してくれるひとは少く、何度途中でくじけそうになつたかわかりません。台風のときある家庭をたずねたらおとしよりが大変よろこんでくれました。その喜ぶ顔をみたら苦労やなやみはフツ飛んでしまいました」

苦労を笑いの中につつんで話す山本さん。いつまでもめぐまれない、おとしよりの力になつてほしいものです